京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

（1 年計画の 1 年目）

1. 研究課題

西部講堂を中心とする戦後文化空間の研究

A study of post-war cultural space focusing on SEIBUKODO

2. 研究代表者氏名

朴　沙羅

Park Sara

3. 研究期間

2020 年 4 月-2021 年 3 月(1 年目)

4. 研究目的

冷戦後の世界における世界的な価値観の動揺が、人文・社会科学の研究者から指摘されるようになって久しい。近年の「先進国」における経済成長の停滞と貧困問題は左右のポピュリズムを生み、それらは反権威・反エスタブリッシュメントとして、今や政治的・社会的に主流となった多様性の寛容を攻撃している。しかし「かつての価値観」や対抗文化の動揺がしばしば指摘されるのに比べて、実際のところそれらは何であったのかについて具体的な研究は多くない。本研究は、西部講堂という自主管理空間に関わった人々の回想を通じて＜ポスト 68 年＞の中で再生産されてきた価値観の内実を明らかにすることを試みる。こうした空間は「広い意味での 5 月の運動やその伝播の中で示された価値転換」（宮島喬「新しい社会運動とポスト 68 年の社会学」p.178）の産物である。地域社会において、またそこに関わった個々人の歴史においてこうした空間は一体何であるのか、それは価値観の動揺が指摘される現代社会において何を教えるのかを明らかにする。

Scholars in humanities and social sciences have been pointing out the shake of values in post-Cold War world. Recession and poverty in “developed” countries generates populism in both right and left sides, leading to attacks to diversity that is now a political/social mainstream. However, compared to the academic suggestions of uneasy “old values” in counterculture, scholars are lacking empirical studies to support the claim. This project tries to cast lights on values of “post-68” and practices that have reproduced them in Seibu Kodo, a milieu of autogestion, through personal recollections of the people who have joined there.

A place like Seibu Kodo is a product of “transformation of values indicated in May Events and its spread” (Takashi Miyajima, Atarashi shakai undo to posuto 68 nen no shakaigaku, p.178). The research project will clarify the meaning of the autonomous place in local community, personal histories, as well as its lessons to contemporary society, where certain values has no longer seem stable.

5. 本年度の研究実施状況

研究目的の達成のために、1年を通して、西部講堂に関係した人々にインタビューの実施を重ねて、彼らから当時の文献の提供を受けることで、戦後日本文化運動史、学生運動史における西部講堂および関係者の検証をすすめた。また「21 世紀の人文学」班や京大内の関連分野の研究者に積極的に声をかけることで、インタビューをより充実させるとともに、共同研究会で活発な議論を展開することができた。西部講堂の先行研究はこれまでなく、主に基礎を充実させるために本研究班の活動は割かれたが、今後の研究において重要な作業を推し進めることができた。

6.本年度の研究実施内容

2020-06-23　新開純也へのインタビュー
2020-07-10　山中透へのインタビュー
2020-10-22　高瀬照美、新開純也、飯田俊の鼎談及びインタビュー
2020-10-22　新開純也へのインタビュー
2020-10-22　共同研究会及び今後の打ち合わせ
2020-10-23　飯田俊へのインタビュー
2020-10-23　木村英輝へのインタビュー
2020-10-23　飯田俊へのインタビュー
2020-10-30　シモーヌ深雪及びBUBUへのインタビュー

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内
福家崇洋
学内
田所大輔（人間・環境学研究科）
学外
安岡健一（大阪大学）、伊藤存（京都市立芸術大学）

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	外国人	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
学内（法人内）	3	7				1	21				8
		(1)					(1)				
国立大学											
公立大学	2	3					4				
		(1)					(1)				
私立大学											
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関	1	1					1				
		(1)					(1)				
その他	7	7					16				
		(2)					(2)				
計	13	18	0	0	0	1	42	0	0	0	8
		(5)	(0)	(0)	(0)	(0)	(5)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	11			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）				
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
大原社会問題研究所雑誌	1	2020年6月	全国労農大衆党結党の検討	福家崇洋
大原社会問題研究所雑誌	1	2020年7月	転向に生きる苦悩 小林杜人の転向論に焦点をあてて	福家崇洋
筒井清忠編『昭和史講義』【戦後篇】(上)	1	2020年8月	戦後共産党史 レッドパージから六全協まで	福家崇洋
歴史学研究	1	2020年8月	書評　河西英通『「社共合同」の時代 戦後革命運動史再考』	福家崇洋
人文学報	1	2021年3月	映画「武器なき斗い」と戦後自主製作・上映運動	福家崇洋
出原政雄・望月詩史『「戦後民主主義」の歴史的研究』	1	2021年3月	大正デモクラシーと戦後民主主義　松尾尊兊の研究を中心に」	福家崇洋
EURO-NARASIA Q	1	2021年3月	養徳社の風景（二）	福家崇洋
『社会民衆新聞・社会大衆新聞』復刻版	1	2021年2月	『社会民衆新聞』『社会大衆新聞』解題	福家崇洋
長妻三佐雄・植村和秀・昆野伸幸・望月詩史編『ハンドブック近代日本政治思想史	1	2021年2月	満川亀太郎・国家社会主義	福家崇洋
大原社会問題研究所雑誌	1	2020年7月	社会主義運動史研究会から運動史研究会へ　：伊藤晃氏インタビュー	伊藤晃,黒川伊織,宇野田尚哉,戸邉秀明,福家崇洋
図書新聞	1	2020年6月	書評 武藤秀太郎『大正デモクラットの精神史 東アジアにおける「知識人」の誕生』	福家崇洋

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

12. 次年度の研究実施計画
なし

13. 次年度の経費
なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等
　2021 年 7 月開催の、日本学生新左翼運動史に関する国際ワークショップで西部講堂と京大学生運動について成果報告をする予定である。またインタビューの文字起こしを適宜行い、解説を付すなどして、西部講堂関係資料として紹介していくことができればと考えている。